

第 14 回(2013.05.20 配信)

篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

女性天皇と女系天皇

現在、天皇の皇位継承についてさまざまな議論がなされています。そこで「女系天皇」とか「女性天皇」とかいう言葉が飛び交っていますが、両者を同じような意味で使っている人もいます。しかし、この言葉の違いは非常に大きいものがあります。

「女系天皇」とは、天皇の母親が天皇だった場合を言います。今日まで女性天皇の子供が天皇位についた例はありません。神武天皇(※1)以来平成の今上天皇まで 125 代の天皇が即位しましたが、この間に 8 人の「女性天皇」が即位しました。この 8 人の女性天皇はすべて「男系の女性天皇」です。簡単に言いますと、女性天皇が男性天皇や皇位継承権をもった皇族男性との間に生まれた子供は天皇になれるのですが、それ以外の男性との間に生まれた子供には皇位継承権がないのです。また、明治時代になって、皇室の制度(皇室典範)が改められて、女性が天皇位に就けることができないことになっています。

ちなみに、イギリス王室では女性国王の子供でも皇位につけます。したがってイギリス王室における王位継承権を持つ人はおよそ千人にのぼるといいますが、現在日本の皇室では近い将来ゼロになると予想されています。その理由は現在の皇室典範では女系の天皇が認められていないこと、天皇に側室がもてないことなどに加えて、皇族の数が太平洋戦争後の連合軍総司令部の命令で減らされたことによるもので、天皇家の歴史が始まって以来の大きな問題が生じています。

最初の女性天皇は第 33 代の推古(すいこ)天皇(在位 592～628)です。第 29 代欽明(きんめい)天皇の娘で、第 30 代敏達(びたつ)天皇と結婚しますが、敏達天皇の没後、592 年蘇我馬子(そがのうまこ)によって崇峻(すしゅん)天皇が暗殺され、蘇我一族の出であることから、蘇我氏によって第 33 代の天皇に擁立されました。聖徳太子を摂政として「冠位十二階」の制定、「一七条憲法」の制定、小野妹子など遣隋使の派遣、役所制度の整備など、多くの改革を行ったとされています。

以後、今日まで 8 人の女性天皇が即位しています。そのうち二人の天皇が重祚(ちょうそ:二度即位した)していますから 10 代の天皇が女性だったわけです。

推古天皇の後は第 35 代皇極(こうぎょく)天皇(在位 641～645)、第 37 代斉明(さいめい)天皇(皇極天皇が再度即位、在位 655～661)、第 41 代持統(じとう)天皇(在位 686～697)、第 43 代元明(げんめい)天皇(在位 707～715)、第 44 代元正(げんしょう)天皇(在位 715～724)、第 46 代孝謙(こうけん)天皇(在位 749～758)、第 48 代称徳(しょうとく)天皇(孝謙天皇が再度即位、在位 764～770)、第 109 代明正(めいしょう)天皇(在位 1629～1643、徳川 2 代将軍秀忠の孫)と続き、第 117 代後桜町(ごさくらまち)天皇(在位 1762～1770)が最後の女性天皇です。

推古天皇が即位した 592 年から、794 年に桓武天皇が平安京に遷都するまでの飛鳥・奈良時代 200 年間のおよそ半分のわずかに 95 年間に、8 代、6 人の女性天皇が皇位についています。なかでも皇極天皇は中大兄皇子が蘇我入鹿を暗殺して「大化改新」を行ったときの天皇でしたし、後に再び皇位について斉明天皇となって百濟救済の派兵をしました。また、元正天皇は「養老律令」の編纂や『日本書紀』の完成をしましたし、孝謙天皇は東大寺の開眼供養をしました。称徳天皇として再度皇位につきましたが、未婚であったため皇位継承問題で、有名な道鏡事件(※2)が起きました。

この時代、日本は急速に中央集権国家を目指し、律令国家社会の確立を進めていた時代であり、日本国の基礎を固める大切な時期でもありました。このような国家の重要な時期に当たって、女性天皇の方が都合が良かった理由が何かあったに違いありません。この頃からイザとなったら男性より女性の方が頼りになったからでしょうか。

※1 神武天皇

神武天皇は大和を平定して初代天皇となった人だと言われています。「天孫降臨」に登場するアマテラスオオミカミの孫であるニニギノミコト(邇邇芸命/瓊瓊杵尊)の三男で山幸彦(ホウリノミコト=火遠理命)の子供のウガヤフキアエズノミコト(鵜葺草葺不合命)の子供が、カムヤマトイワレビコノミコト(神倭伊波礼毘古命)で、この人が神武天皇だとされています。つまりアマテラスオオミカミ(天照大御神/天照大神)の子孫です。

神倭伊波礼毘古命が5人兄弟の末子でありながら天皇になったのは、大和平定の途中で兄たちが次々と戦死したからで、中には海神の怒りを静めるため荒海に飛び込み、生け贄になった兄たちもいたといいますが、この大和平定は、「神武天皇の東征」という有名な話です。熊野の山中で一羽の八咫鳥(やたのからす)が飛んできて道案内をしたり、激しい戦いの最中に金色の鵄(とび)が弓の先に止まって輝いたので、敵は目がくらんでしまい逃げ去ったりした話があります。明治時代に制定された功績のあった軍人に与えられる金鵄勲章(きんしくんしょう)はこの故事に由来しています。ちなみに、八咫鳥は日本サッカーのシンボルとなっています。

神倭伊波礼毘古命が大和国橿原の宮で即位したとされているのは紀元前660年1月1日とされており、明治になって太陽暦を採用したときに紀元前660年を皇紀元年とし、1月1日は太陽暦で2月21日なので、この日を「紀元節」といって大切な国家の祝日にしました。在位は76年、127歳で没し、奈良県優原市の畝傍山に葬られたといわれています。しかし、この時代は縄文時代の後期にあたり、食糧や生活環境の厳しい時代に、127歳まで生きられるはずがないから信憑性がないという人もいます。

※2 道鏡事件

天皇家は「万世一系」であるといいますが、その皇位継承を巡っての争いは何度もありました。672年、大海人皇子(おおあまのみこ=天智天皇の弟、後の天武天皇)と大友皇子(おおとものみこ=天智天皇の皇子)が争った壬申の乱や南北朝時代の争いなどは有名ですが、いずれにしても天皇家一族の皇位継承権争いであり、どちらも天皇の血筋の者が争ったのですが、血統そのものが途絶える危機がありました。それが道鏡神託事件です。

弓削道鏡(ゆげのどうきょう)は、孝謙上皇(女帝)の病気を呪法によって治したことで上皇の信任を得ましたが、孝謙上皇が再び皇位につき称徳天皇となってからは、道鏡の権勢は絶大なものとなりました。称徳天皇は道鏡に仏法の立場から政治に関与させ、終いには道鏡を皇位につけようと思い始めましたが、和気清麻呂(わけのきよまろ)が神のご神託が得られなかったと言って反対したため、計画は頓挫してしまい、怒った称徳天皇は清麻呂を九州に流してしまいました。後に称徳天皇が亡くなると、都に呼び戻され出世していくのですが、和気清麻呂が九州に向かう途中、道鏡は清麻呂を殺害しようとし、ところが数百頭の猪の群が刺客を倒して清麻呂を護ったという伝説があります。そこで、和気一族の氏神を祀っている和気神社の狛犬は猪の姿をしています。余談ですが、狛犬は古代エジプトから伝わったもので、ライオンでしたが中国から朝鮮半島の高句麗を経由して日本にもたらされた際に、高句麗の犬だと思われて高句麗の犬からコマ(高麗)犬になったとの説があります。

道鏡は770年称徳天皇が亡くなると捕らえられて、下野の国(栃木県)に流され亡くなりましたが、称徳天皇がこれほどまでに道鏡を信頼した裏には、夫が持てなかった女帝と道鏡の間には男女の関係があったからだというのが通説です。

もちろん噂話ですから信憑性はありませんが、後世になって、道鏡は女帝をも狂わすほどの巨根の持ち主だったという話が出来上がったりして、「好き者(好色者)」の間で有名になりました。

(篠井純四郎)